

学会印象記

アジアに勇気を与えたバンコク会議

沢田 貴志

Takashi SAWADA

港町診療所

全ての人に ACCESS を

アジアでは10年ぶりの世界エイズ会議、そのテーマはACCESS FOR ALL (全ての人にアクセスを)であった。これまでのBreaking the Silence, Bridging the Gapといったテーマに比べれば大きく前進したスローガンである。こうしたテーマが選ばれた背景には、グローバルファンドの登場に続きWHOも3 by 5を打ち出し途上国の治療アクセスを改善しようという大きな流れができてきたことと無縁ではない。また宿主国のタイが予防や治療へのアクセスの改善に実績を上げてきたという強い自負をもっていることも関係しているだろう。しかし、多くの人々にとって依然として「本当にACCESSできるのか?」といった疑問は尽きない。

開会式の前に対話

その疑問を象徴する出来事が開会式当日にあった。タイHIV陽性者ネットワーク(TNP+)を中心に世界各地から集まった1,000人以上のHIV陽性者とその支持者が会議場内を治療へのアクセスの拡大を求めて行進をした。会議参加者への平和的なメッセージといった雰囲気であったが、なかには“You Talk, We Die”(あなた方は議論をするだけで死ぬのは私達だ)というショッキングなプラカードもあった。行進の後には、国連機関のキーパーソンが壇上に立ち、行進の参加者達から「薬や予防のプログラムが自分達に届かず大勢の仲間が死んでいる」と問題提起を受ける場面があった。グローバルファンドのリチャード フィーチャム事務局長、UNAIDSのピーター ピオット事務局長、WHOのジム キム氏の3人が次々に壇上に上がり、それぞれファンドの運営に感染者の声が反映されやすい仕組みを整えること、ハームリダクションをUNAIDSが政策的に各国に推奨していくこと、トロント会議までに300万人を超える人々にエイズ治療が届くように努力することを表明していた。国や地域によって治療の普及状況にかなりの格差があったり、政策の外におかれて治療やケアにアクセスできない人々がいることが提起されたが、それぞれの国連機関の代表者がそのことを認め、人々の前に実際に出てきて対話を行っていく姿勢に感銘を受けた。全ての人

にアクセスを保証していきたいとする会議の趣旨がここにも尊重されているように感じた。

アジアの危機

今回の会議の中では、アジアの危機についての発言が目立って多かった。特にショッキングだったのは、1日目のプレナリーに先立ってティム ブラウン氏が発表した中国の予測値である。2010年に1,000万人というCIAレポートは既に知られているが、ティム ブラウン氏らの疫学専門家によればこのまま積極的な介入がされず他のアジア地域と同様の疫学モデルで感染の拡大が進めば2030年には男性の5%女性の2%に達するという。こうした事態を避けるためには適切な時期に必要な対象者に対する科学的に証明されている予防手段を実施することが必要であるとされていた。特に性産業・MSM・薬物使用者といった対象で現実的な予防が推進できるかどうかが鍵であり、このためには各界の指導者達がリーダーシップを発揮する必要があると強調された。「アジアでの危機的な状況が進んでおり、今を逃すと取り返しがつかないことになる」というのが今回のバンコク会議を通じて発信された重要なメッセージのひとつだったように思う。科学プログラム、コミュニティプログラムに並んでリーダーシッププログラムが作られたのは、こうしたリーダーシップの発揮を求める主催者側の意向の現れであろう。

アフリカでもっとも予防に成功したとされるウガンダのムセベニ大統領が現職大統領としては唯一プレナリーセッションに現れ、成功の秘訣として現実に則したすぐれたエイズ政策が大事であることを強調していた。他にも宗教界・経済界・教育界などの要人がリーダーシッププログラムで参加者と意見を交換した。産業界のリーダーシップとしてはタイの産業界がTBCA(タイエイズ対策企業連盟)という組織を作り、積極的な社会貢献をエイズの分野で行っていることが印象的であった。イギリス系の大手銀行であるスタンダードチャータード社は、ランチョンセミナーを主催しており、タイ支社の女性CEOがエイズ対策を積極的に行うことが企業にとって自社の人材を守り企業の社会的信用を高める重要な戦略であることを説得力を持って語っていた。

アクセスはできるのか

会議を通じて開発途上国の人々に希望を与えたのはホスト国タイの成功談だったのではないか。開会式でのタクシン首相の演説は、タイがいかに予防の面で成果をあげているかを具体的な数字を挙げて雄弁に語った。この会議にあわせて公衆衛生省が発表したホームページによれば、タイでは1991年には年間約14万人が新たに感染をしたと推定されていたが、国をあげたエイズ対策の推進によりコンドームが普及し、STIが激減し、2003年には年間新規感染者は推定2万人と激減した。こうした成功を背景に、タイ政府は国営製薬公社でARVの一部（国際特許法上可能な範囲で）をgeneric薬として生産し、国内で低価格で供給しはじめた。これによって国内の全てのHIV陽性者にARVへのアクセスを保障する計画が進んでいる。また、周辺諸国への無償提供やグローバルファンドへの資金拠出などの約束もされた。こうしたタイの成功は、1991年の民主化によって成立したアナン首相の内閣がミスターコンドームで知られるミチャイ氏を担当者に抜擢して国家エイズ対策委員会を内閣直属の組織として立ち上げたことに始まるとされている。以来の歴代政権がエイズを国家最優先課題として積極的に取り組んできた成果が今実ろうとしているわけだが、演説の巧みさで知られるタクシン首相にかかると彼自身の成功談のように語られていた。

原稿を見ずに（おそらく視線の先に原稿が映し出されていたのだろうが）具体的な数字をあげてとうとうと英語で演説を続け国際社会の参加者から拍手を浴びつづけるタクシン首相の姿はタイ国内に何度もテレビで流され長期政権を目指す首相の最高の選挙対策となっただろう。エイズが一国の首相の政治生命に大きな影響を与えるということが示された瞬間であった。タクシン首相の是非はさておき各国の元首がエイズの重要性の大きさに気がつききっかけになってくれることを期待したい。

ハームリダクション

もっとも、タイのエイズ政策の中で対策が遅れていると指摘されてきた薬物使用者に対する対応では大きな注文がつけられた。昨年タクシン首相が主導して行った「麻薬との全面戦争政策」では、薬物使用者に対する十分なエイズ予防と薬物治療の環境を整えることなく強権的な摘発を行ったために、UNAIDSなどが推奨しているハームリダクションプログラムの基盤が壊され、収容政策の結果かえって刑務所内で不衛生な針が共有され感染を広げたのではないかと批判を浴びている。こうした国際社会の批判に答えるべく「薬物使用者を犯罪者のように扱ってきた過去の政策を反省し、サポートの必要な人々として遇しハ-

ームリダクションプログラムを行うように政策を転換した。」と演説したタクシン首相は、地元NGOから「タクシンは嘘をついている」という横断幕を出されて一時絶句する場面もあった。開会式の最後のスピーカーにはタイのHIV陽性者の中で最も英語が上手と定評があるパイサン スワナウォン氏を選ばれていた。パイサン氏は薬物使用で感染したことを公表した上で感染者のケアの改善に積極的に取り組んでおりTNP+の代表を務めていたこともある。しかし、首相の演説などで大いに時間が超過した上に司会（首相のスポークスパーソン）がほとんどの主賓をアトラクションの間にレセプション会場に誘導してしまったこともありパイサン氏の演説が予定されていることに気づかない大多数の参加者はアトラクションの間に会場外に出てしまうという事件があった。これが政府側の意図的な演出であったかどうかは誰もわからないが会議の最も重要な参加者の一人であるHIV陽性者の発言がこのような扱いを受けたことは最近の国際エイズ会議ではなかっただろう。

タイではハームリダクションをめぐるまだ混乱があることの現れであると思われるが、こうした駆け引きはともかくとしてタイでは予防が成功し、性産業や一般人口の新規感染を大幅に減少させた今、新たな感染の4人に一人が経静脈薬物使用を介した感染と推定されている。タイ公衆衛生省としてもこの予防に新たに踏み込みたいところだろう。今まで手がつけられてこなかったハームリダクションに手をつけることができれば、タイはアジアのエイズ対策のパイオニアとしての立場を更に固める結果になるだろう。過去の政策には批判があるが今回の会議でタクシン首相がハームリダクションを実施することを宣言した意味合いは大きい。

予防すら届かない女性たち

今回発表されたところによればついに感染者の半数が女性で占められるようになったという。しかし、女性は予防へのアクセスも治療へのアクセスも男性に比べて届きにくい。ウガンダの成功をA (abstinence), B (be faithful), C (condom)の成功だとする向きがあるが、これに対して開発途上国の多くの女性にとってA, Bを守っていても夫から感染するし、女性がエンパワーされなければAもBも実践できない。という指摘がされ、女性用コンドームやmicrobicideのような女性が実施できる予防法開発の重要性が強調された。

また女性のほうが男性より治療へのアクセスがしにくいという点も話題になった。これと関連するが、今回の母子感染予防のトピックは、従来行っていたAZT単独の母子感染予防にネビラピンの出産時単回使用を追加することによって感染率が3分の1に減少しわずかに2%になったとい

うタイの臨床試験の結果であろう。

この結果によって AZT+ネビラピンによる母子感染予防が一躍脚光を浴びた形だが、同時に発表された調査結果では、単回使用に過ぎないにもかかわらずこのあとネビラピンを含む HAART を母親が受けた際にネビラピン使用群でネビラピン耐性を獲得していた確立が有意に高かったという結果も示された。現在安価な generic 薬が生産されているのは基本的には 1996 年以前に TRIPS 条約（特許の国際協定）が締結される以前に開発された薬であるため、開発途上国の住民にとっては HAART を受けるためにはネビラピン以外の選択肢がないことが多い。現在、generic が普及し始めている状況下でネビラピンという選択肢を母子感染予防と引き換えに失ってしまう可能性については批判的な意見も多い。実際、母子感染予防にネビラピンを使うべきかという議論は、アフリカを中心に大きな議論となっており、今後も論議が続くであろう。

国際会議と地域社会が出あう場所

今回はじめてお目見えしたグローバルビレッジという企画は、タイなどの地域の地域社会と会議を結び接点として機能をしていた。会場内の一角を仕切り国際会議の参加証がなくとも参加できるようになっていたがそのスペースが広大で展示場とほぼ同じぐらいのスペースがあったのではないだろうか。会場には本会議場の重要な話題を地域の参加者に紹介するステージ。さらに、多数のラウンジが設けられ HIV 陽性者、セックスワーカー、薬物使用者、性的少数者、若者、移住労働者、宗教者などの話題別の議論がで

きる場が作られていた。それぞれの会場ともに地元で取り組む人達が盛んにパフォーマンスやワークショップを開催しており、さながら NGO 活動の博覧会のようなであった。タイのエイズに関わる人々の層の厚さを見ることができた。一方会場には制服姿の生徒達も多数見学に訪れており、国際会議の話題を国内の若者達に浸透させ知識の普及につなげようという公衆衛生省側のもくろみもある程度達成されたのではないだろうか。会場に一村一品運動（日本の大分県からアイデアを輸入してタイでもこの数年盛んになっている）のブースが出され、各県の特産品を展示販売していたことがエイズ対策と地域振興がリンクし始めているタイらしい光景であった。

市街地に繰り出したエイズ会議

グローバルビレッジの熱気は会場内にとどまっていた。14 日の夜には、バンコク市内の繁華街シーロム通りに繰り出し、3,000 人のパレードが行われた。ラウンジの構成そのままに思い思いの衣装で参加者が街頭の市民にメッセージを届けた。

掲げられているメッセージは、それぞれの立場から治療や予防へのアクセスを求める声であったが、沿道の市民は手を振って応え、警察官もニコニコととても友好的に規制を行っており、カーニバルの出し物のように迎えられていた。パレードを推進していたのが元エイズ対策の責任者であった前述のミチャイ氏であったこともあるだろうが、それだけタイの社会がエイズを通じて当事者の声を大切にす社会に発展してきたことの表れではないだろうか。パ



対話をする Peter Piot 氏

レードの最後に TNP+代表のカモン ウパケウ氏が「私達はエイズを通じて社会に目を開き力を合わせて生きることを学んだ。私はこのことを教えてくれたエイズに感謝している。」と結んで大きな拍手を浴びていたことが印象的だった。タイでは治療の選択肢が限られている上に社会保障制度も先進国のように手厚くなく感染して生きていく

ことにはまだまださまざまな困難が伴う。そんな中で社会に貢献し前向きに生きていこうとする HIV 陽性者達の姿が市民のエイズに対する認識を変え、対策を進める上で大きな役割を担ってきたのだろう。タイの市民社会をあげた歓迎が現場で取り組む多くの人々、とりわけアジアの人々に元気を与えてくれたと信じている。